

なぜ今、中学生は国立工業高専に進むのか

—現職国立工業高専教員へのインタビュー調査から—

吉 村 薫

1. 問題設定

高等専門学校の大半を占める国立工業高等専門学校（以下、「高専」と記述する）は、高度成長期であった1960年代の設置開始以来、中学校を卒業したばかりの15歳の若者を、5年間の専門教育によって、技術者をはじめとする、日本の工業界を支える即戦力に育て上げてきた。ところが現在、そのあり方は大きく変化している。たとえば、5年制の高専本科を卒業後、すぐに就職するのではなく、2年制の高専専攻科や大学、さらには大学院に進学し、勉学や研究を続ける者が増えている。

かつて、中学生の高専への進学動機として最も多かったのは、卒業後の就職への期待であった。矢野ら（2015）が1976年から2008年に国立工業高専を卒業した者を対象に行った調査によれば、進学理由として最も多かった回答は「就職に有利」であり、複数回答で全体の約半数がこの選択肢を選んでいる。当時の高専が即戦力の育成機関であったからであると考えられるが、卒業後の進路が多様化している現在、中学生はどのような動機や目的で高専に進んでいるのであろうか。

また、学校基本調査（文科省2017）によれば、2017年に高専本科を卒業した者の進路の内訳は、6割程度が就職で、4割程度が大学や高専専攻科への進学である。つまり、すでに半数近くの高専生にとって、高専本科は最終学歴校ではない。高専本科の卒業生は、おもに大学の3年次に編入学することができ、近年ではこの制度について、学校説明会等で詳しく説明する高専も多い。先述した矢野ら（2015）の研究では、高専への進学理由として、「大学への編入学」についてもたずねている。「就職に有利」や「学費が安い」、「技術への興味」、「専門的知識を身につける」等には及ばないものの、若い世代ほどこの選択肢を選んでおり、最も若い2005～2008年の卒業生では、12.6%となっている。現在の中学生は、2008年の卒業生よりもさらに15歳程度若い世代であり、編入学のために高専に進む割合がさらに上がっていると推測できる。卒業生の大学進学率には高専間で大きな差があり、高いところでは7割程度におよぶ場合もある。このような場合は特に、「卒業後に大学に進みたい」という理由で高専に入学する者が多いと考えられる。

なお、国公立大学の編入学試験であるが、併願が可能、試験科目が2～3科目程度、（入学後の成績等で振り分けを行う大学において）受験時に学部や学科の指定が可能であったりするなど、通常の入学試験とは異なる点がいくつかある。募集人数や試験の性質が異なるため、入学試験と編入学試験を単純比較することはできないものの、これらの編入学試験の特徴は、多くの者にとって、魅力にな

りうると考えられる。これらの事情から、高専から大学への進学の一やすさを指摘し、また実際に近年の高専卒業生の大学進学率が上昇していることもふまえて、近年の高専を「進学コース」（井上 2007）、「隠れた進学校」（広田 2018）等と表現した例もある。

現在の中学生が高専に対して抱くイメージは、どのようなものであろうか。就職を見据えた「即戦力の育成機関」というよりは、大学や大学院に進むための「進学校」、あるいは「受験予備校」のようなものになっているのではないだろうか。つまり、現在の中学生にとっての高専が、卒業後に進学するための手段になっているのではないだろうか。

2. 先行研究の検討

これまでの、高専に対する学問的な関心は、技術者教育の実例や高専教育への評価といった「高専での教育」（たとえば、井上 2007、福政 2012、阪本 2013）や、高専卒業生の進路や就職後の高専卒業者の様子といった「職業社会への接続」（たとえば、荒木 2007、矢野ら 2015, 2018）に集中している。理系職へのキャリア意識や、理工系への進路選択の要因（たとえば、小倉ら 2012, 2013）については、すでにいくつかの研究がなされているが、いずれについても、高専についての研究ではない。これらのうち、高専への進学理由や進路意識（自身の進路に対する希望や価値観）を扱った調査はいくつか含まれるものの、あくまでも他のテーマの研究の一部として行われているにすぎず、また、最も新しい研究であっても、およそ 15 年前に高専を卒業した者に対する調査である。今の中学生の、高専への進学行動をとらえた研究は、筆者が調べた限りでは見当たらなかった。

3. 調査について

本研究の目的は、現在の高専入学者の志望動機を明らかにすることであるため、高専（本科）1 年生（新入生）や高専志望者（中学生）と直接の関わりがある教員に、調査への参加を依頼した。回答者の大半が、インタビュー調査実施時点で 1 年生の授業を担当、もしくは 1 年生の担任を務めている。いずれの回答者についても、インタビューの実施前もしくは実施後に本研究全体の概要及び目的を説明し、録音もしくはノートへの記録、個人が特定できない形式でのデータの公表及び分析について、許可を得た。なお、この調査は、現在の中学生が高専を志望する動機や過程を明らかにすることを目標として筆者が取り組んでいる、一連の研究の一部であり、同時期に、同様の調査を、複数の高専において、あらゆる対象（高専志望者（中学生）や高専生、高専教員、高専卒業生）に対して行っている。今回の調査対象である、A 校の教員からは、近年の高専志望者や高専入学者の全体像を明らかにすることを目指した。

表 3-1 に調査の概要を、表 3-2 にインタビューの項目（本研究に用いる質問のみを抜粋したものを）、表 3-3 に回答者の基本的属性をそれぞれ示した。

表 3-1 調査の概要

調査対象者	国立工業高専（A校）の教員のうち、新入生や中学生と直接の関わりがある者
調査日時	2018年8月10日（回答者No.01-06）、2018年10月13日（回答者No.07-10）
回答者数	10名（男性9名、女性1名）
調査方式	1人あたり60分程度の半構造化インタビュー
おもな調査目的	近年の高専入学者の志望動機について、教員から見た全体像を明らかにする

表 3-2 インタビューの項目（抜粋、質問順）

①	1年生と、高専への志望動機や中学時代の進路意識について話す機会がありますか。
②	学生の様子を見ていて、「この学生は所属学科に向いている（向いていない）」と感ずることはありますか。もしある場合、どのような場面ですか。
③	入学後に「高校に行けば良かった（高専に来なければ良かった）」と話す学生はいますか。
④	1年生に対して、先生ご自身の専門領域について話す機会がありますか。
⑤	学生から、「入学前は高専に〇〇というイメージを持っていたが、実際はそうではなく、××だった」というようなことを聞くことはありますか。もしある場合、どのようなことですか。
⑥	中学生向けの公開イベント（オープンキャンパス、学校説明会等）のうち、入学前に中学生に高専のことを知ってもらおうと、「特にこれには参加してほしい」というものはありますか。
⑦	1年生の間に、（中学時点の）将来の目標や希望の進路を変更する学生はどの程度いますか。
⑧	所属学科の学びに興味や関心を持たせる（持続させる）ために、教員が学生に対して取り組んでいることはありますか。もしある場合、どのようなことですか。
⑨	高専卒業後の進学を目的に入学している（と思われる）学生は、どの程度いますか。

表 3-3 回答者の基本的属性

No.	性別	担当学科等	職位	勤務年数 ⁽¹⁾ (年)	備 考
01	男性	専門・機械系	教授	31-35	
02	男性	専門・機械系	准教授	06-10	A校卒業生
03	女性	専門・建築系	准教授	11-15	外国人、本国の大学から日本の国立工業高専（A校ではない）に編入、卒業
04	男性	一般・英語	准教授	11-15	他の国立工業高専での勤務歴あり
05	男性	専門・情報系	教授	26-30	
06	男性	専門・建設系	教授	21-25	
07	男性	専門・建設系	准教授	06-10	
08	男性	専門・電気系	教授	21-25	
09	男性	専門・建築系	助教	01-05	A校卒業生
10	男性	一般・数学	教授	21-25	

※「専門」：専門科目（工業系科目）

※「一般」：一般科目（英語、数学等の工業系以外の科目）

4. 調査対象校（A校）について

関西地方にある国立工業高専で、最初期の1962年に設置された、いわゆる「一期校」の1つである。機械系、電気・情報系、建設系、建築系の4つの学科があり、1学年あたりの学生数は160名程度の、比較的小規模な高専である⁽²⁾。

表4-1に、近年のA校本科卒業生の進学率を示した。約半数の学生が本科卒業後に大学に編入学しているが、現在の高専本科卒業生全体の進学率は約40%、大学進学率は（本科卒業生全体の）約25%であるため（文科省、2018）、A校は進学率がきわめて高い高専であるといえる。このような場合、卒業後の進学を理由にA校を目指す中学生が、多くみられるのではないかと考えた。

表4-1 A校本科卒業生の進学率（2015～2017年度卒業生）

卒業年度 (年度)	卒業生数 (人)	進学率 (大学+専攻科)	進学率 (大学)	進学率 (国公立大学)	進学率 (上位国立大学)
2017	171	63.2%	52.0%	50.9%	15.8%
2016	168	73.8%	54.8%	53.0%	13.1%
2015	167	64.7%	45.5%	44.3%	11.4%

※(進学率) = (実進学者数) ÷ (卒業生数) × 100。各数値についてはA校のホームページを参照した

※上位国立大学：旧帝国大学7校（北海道、東北、東京、名古屋、京都、大阪、九州）に東京工業大学を加えた計8校

5. 調査結果

まず、表3-2のインタビュー項目を、質問のテーマごとに4つに分類し、表5-1に示す。斜体で示した部分はインタビュー結果の引用箇所であり、「No. xx」は表3-3の回答者No.に、丸囲みの数字(①, ②, ③, ……)は表3-3のインタビュー項目の番号にそれぞれ対応している。特定の質問に対する回答ではない引用箇所については、回答者No.のみを示した。なお、引用部分について、回答内容を損なわない範囲で、筆者が要約あるいは補足した箇所がある。

表5-1 インタビュー項目の分類

質問のテーマ	表3-2の質問番号
高専出願時、入学時の学生の様子	①, ⑨
在学生の学校生活の様子、教員と学生の関わり	②, ③, ④, ⑤, ⑧
高専卒業後の進路	⑦
中学生への高専の紹介	⑥

5-1. 高専出願時、入学時の学生の様子

A校の場合、新入生と教員が中学時代の話をする機会は、制度的には用意されていないとのこと

ある。ところが、学生同士の会話に入ったり、面談時にたずねたりすることによって、多くの教員が、新入生の志望動機や中学時代の進路意識について、把握していた。

「(中略) 1年生とは、中学時代の話をよくする。純粋に「建築を学びたい」というだけで進学している子は、1~2割程度だと思う。A校に入る前から、大学編入を意識している子が多く、中には「大学受験をしたくない、センター試験を受けたくない」という理由で来る子もいるし、「学力はあるが中学校の内申点が低い」という場合もある。〇〇(筆者注：A校がある府県)は、公立高校の入試において、内申点をとても重視するため、学力が高いにも関わらず、「A校に行くか、レベルの低い公立高校に行くか」という選択を迫られる子が、一定数生じる。中学校の内申点が低くなった理由はいろいろあるが、「学校に行けていなかった」、「集団になじめなかった」、「協調性に課題があった」という子もいる。高専も、推薦選抜では内申点を見るが、学力選抜では、公立高校ほどは見ないし、特にA校の場合は、定員の1割程度を学力試験の点数だけで合否判定しているので、A校が、高い学力がありながら、公立高校の入試で不利になる子の受け皿になっているという面は、少なからずあると思う。(No. 03, ①)」

高専が、公立高校とは異なる基準で入学者の選抜をしていることから、高専が、「公立高校の入試で不利になる子」の受け皿になっている、という指摘である。このことに関して、やや別の角度からではあるが、No.01の回答者も以下のように話した。

「(中略) A校独自の取り組みとして、来年度(筆者注：2019年度)の推薦入試から、面接の代わりに、グループワークを取り入れることにした。どの学科、学年にも、クラスメートとのコミュニケーションや、協働作業ができない子が一定数いて、学内でたびたび問題視されてきた。今の時代の社会において、コミュニケーション力がいらぬということはあるに違いない。最低限、授業内でのディスカッションぐらいはできてほしい。グループワークで合否を分けたいということではなくて⁽³⁾、とにかく、中学生に、A校がコミュニケーション力を重視しているということを知ってもらうことが、グループワークの導入を決めた一番の目的である。単に学校説明会で教員が「コミュニケーション力を重視している」と言うだけではなく、入試の評価基準に組み込むことで、A校が、本気でコミュニケーションや協働性を大事にしているということを知らせたい。できない子や苦手な子を排除するつもりではなく、むしろ支援していくつもりであるが、「高校と違って、高専ではコミュニケーション力は求められない」という勝手なイメージだけは、捨てるもらいたい。(No. 01)」

文中の「グループワーク」とは、試験当日に課題を与えて少人数のグループで取り組ませ、その様子、とくにグループ内でのコミュニケーションの取り方を評価するというものである。たとえば、「マシュマロと乾麺のスパゲッティを使って、高いタワーを作る」というような課題が出るものの、出来

上がったタワーの高さ自体は採点されず、タワーの制作に向けた話し合いや、役割分担の様子が採点対象となる。No. 1, No. 3 のいずれの回答者も、「集団生活やコミュニケーションに課題がある中学生が、高校を避けて、高専に進んでいる」ということを指摘している。ポジティブな「高専に行きたいと思う理由」だけではなく、ネガティブな「高専に行かざるを得ない理由（高校に行けない理由）」というものも、存在するということである。なお、No.01 の回答者が指摘した「高校と違って、高専ではコミュニケーション力は求められない」ということであるが、高専に対する一方的なイメージが存在することに対する指摘は、「中学生には、特に学園祭に来てもらいたい。世間一般のイメージだけで判断してしまうのではなく、在学生や、高専の雰囲気が「普通だ」というところを、実際に見てほしい。(No. 05, ⑥)」のように、他にもみられた。

卒業後の進学を目的とした、A校への入学者であるが、「3割ぐらいの学生は、卒業後の進学を目的に入学していると思う。入学動機をたずねたときに、「国立大学に行きたいから」と話した子もいる。(No. 02, ⑨)」、「7割ぐらいは進学を目的とした入学だと思う。「建築学に興味はないが、いい大学に進学したかったので⁽⁴⁾」と話す子もいた。1年生の段階で、すでに「〇〇大学に行きたい」と決めている子もいる。(No. 03, ⑨)」、「半分ぐらいは、進学を目的とした入学だと思う。(No. 04, ⑨)」というように、具体的な割合はまちまちであるものの、ほぼすべての回答者が、「卒業後の進学のためにA校に進む者」が「存在する」、もしくは「存在すると思う」と回答した。また、やや極端な例ではあると思われるが、「入学する学科の分野には興味がないが、進学のためにA校に進む」という者の存在も明らかになった。なお、「大学を目指すことは否定しないし、むしろ個人的には大学に行った方がいいと思っている。ところが、高専のカリキュラムは、進学を目的に作られたものではないので、進学だけを目的に入学すると、周りも、本人も、大変だと思う。(No. 01)」、「進学を望む学生は、たしかに多い。おそらく、志望動機の幾ばくかは占めていると思うが、それが第一の動機かどうかはわからない。「分野に興味があって、かつ進学したい」ということであれば、問題ないと思っている。(No. 05, ⑨)」のように、学生が卒業後に進学すること自体や、いくつかの志望動機の中に「卒業後の進学」があるということについては、ほとんどの教員は、特に問題視していなかった。

5-2. 在学生の学校生活の様子、教員と学生の関わり

「1年生の間は一般科目が多いため、学科や専門の向き不向きというよりは、理系に向いているかどうか、という話になる。それでも、まだ1年生、低学年の間は、その学生の適性を判断する、特に否定する段階ではまだないと思う。実際、低学年のときには数学や物理⁽⁵⁾が苦手なために、あまり振るわなかった学生が、高学年になって、構造工学や水理学⁽⁶⁾を学ぶようになって、突然頭角をあらわすことはよくある。(No. 07, ②)」

「実験のときに考えられなかったり、指示されたことしかできなかったりした場合など、「向いていないかもしれない」と思う場面はあるが、あくまでも一面的あるいは一時的なものだと思う。その学

生が、この先もずっと「向いていない」と断定できるものではないため、たとえ自分の心の中であっても、向いているかどうかの、結論は出さないようにしている。(No. 08, ②)」

多かった回答は、「1年生の段階ではまだ、「理系」のような大きな括りであればともかく）学科に対する向き不向きはわからない、判断すべきではない」ということであった。また、分野にもよるが、以下のように、向き不向きそのものの存在を疑う回答もみられた。

「そもそも、建築の仕事や建築学に、向き不向きはほとんどないように思う。建築という、製図や空間デザインばかりがイメージされがちだが、電気設備の設計や建築史のような、一見すると他分野のように思えるものもある。特定の分野が苦手だとしても、それがすぐに、建築の分野全般に向いていないということにはならないと思う。(No. 09, ②)」

また、高専入学後に「高校へ行けば良かった」、「イメージと違った」と話す学生については、約半数の回答者が「いる」と回答した。授業や課題に対するものが多いということである。ただし、多くの場合は「たまに聞くが、たいていは冗談で言っているのではないかと思う。(No. 06, ⑤)」というように、(たとえば退学につながるような) 深刻な話ではないと思われるとのことであった。

本格的な専門教育がまだ始まっていない1年生に対して、どのように専門分野との接点を作っているのかということについてもたずねた。半数程度の教員が、授業やホームルームの時間に、自身の専門分野（学生時代にどのような研究をしていたか、現在研究室でどのような研究をしているのか等）について、「話す」と答えた。学科単位での取り組みについては、「課外活動として、現場見学会を行い、橋梁の工事現場や、ダムなどを見せるようにしている。(No. 07, ⑧)」、「建築が「図面と大工」だけではないということに気づいてもらうために、授業時間の一部を使って、建築を取り巻くさまざまな職業の紹介をしている。(No. 09, ⑧)」というように、様々な取り組みがみられた。なお、専門分野についての理解が進むことで、職業に対するイメージが広がる、あるいは変わる、ということは、建築系の分野に限った話ではない。

「(中略) ゲーム⁽⁷⁾をきっかけに情報工学を志す中学生が一定数いるが、彼らの多くが、高専に入って実際に情報工学を学んでみて、情報工学がゲームだけではない、ということに気づく。「情報工学の世界はこんなに広がったのか」と知って、その上でやりたいことを見つけ直して、ゲーム業界に進むことをあきらめるのではなく、ポジティブに進路変更していく学生が多い。(No. 08, ⑦)」

中学生が、専門分野について得られる情報には、限界がある。狭い範囲の理解のまま学年が進んでしまうと、専門科目の授業に、興味や関心を持ちづらくなることや（その分野を学ぶ上で必要なものであっても、学生の狭い「専門分野のイメージ」にあてはまらないため）、進路選択のときに、限ら

れた範囲でしか検討できないということにつながりかねない。そのため、低学年の間に、できるだけ分野内の多くのことに、興味や関心を持たせることが必要になる。

5-3. 高専卒業後の進路

卒業後の進路については、本人の判断に任せており、A校として特に勧めているものはないとのことである。ただし「個人的には大学に行った方が良いのではないかと考えている。今の時代、特に理系の職場においては、高専卒は決して高学歴ではない。高専卒は能力面で「大卒並み」⁽⁸⁾として扱われるとはいえ、就職後の昇進の早さなど、実際には差がある。(No. 01)」のように、「個人的な意見」と断った上ではあるが、学生が大学に進むことを勧める回答も複数みられた。

1年次での希望進路の変更については、「世界が広がるので、変わる子が多い。(No. 03, ⑦)」、「ほとんどない。(No. 05, ⑦)」というように、教員ごとにまちまちであった。

5-4. 中学生への高専の紹介

「高専は、特殊な進路であるため、よく考えてから入学してほしいと、常に言うようにしている。たとえば、物理や化学⁽⁹⁾をやりたいという人には、高専進学を勧めることはできない。大学への編入制度が近道に見えるのかもしれないが、単に「理系の大学に行きたい」というだけであれば、A校が狙えるだけの学力レベルであれば特に、トップレベルの高校、できれば理数科の高校に行くほうが、よっぽど近道だと思う。(No. 01)」

「工業高専は「工学系」の学校であり、理系の学問全般を学ぶ場ではない」ということであるが、中学生にとって、「工学系」の意味や範囲を理解することは、非常に難しいと思われる。A校の場合、入学前に、オープンキャンパスや学校説明会などに参加し、学校や学科について、深く知ることを勧めている。さらに、学校説明会の際には、「高専に進むことや、やりたいことに迷いがあるのであれば、高専に進学せず、普通科や理数科の高校に進む方が無難」とも説明している。A校に興味を持ち、説明会に足を運んだ中学生に、「場合によっては来ない方が良い」と言うのは、一見すると冷たい対応であるように思われる。それだけ、A校に卒業後の進学だけを目的とした中学生が集まりやすいということではないだろうか。進学率の高さゆえに、A校を経た大学編入が、中学生には「近道」に見え、仮に、工学への興味や関心が薄くても、その「近道」に魅力を感じた中学生がA校を目指す可能性は、十分に考えられる。5-1.に示したように、実際に「専門分野に興味はないが、大学に進学したいからA校に入学した」という中学生の存在も明らかになっており、教員が、中学生のこのような動機でのA校への入学を懸念していると考えられる。

また、すでに5-1.にも示したが、「A校は、世間で言われているほどの、留年者や退学者を出していない。(No. 01)」というような、いわゆる「普通の学校生活」を送ることができる、という回答もみられた。高専は、高校に比べて学校数が圧倒的に少なく、学校生活の様子等が、どうしても世間に

知られにくい。「中学生に参加してほしいイベント（表3-2の間⑥）」についてたずねたときも、在学生の雰囲気を見てほしい、学校の様子を実際に見てほしいといった理由から、「オープンキャンパス（体験入学会での実験補助役や、校内の案内役等として、在学生が中学生の対応にあたる）」や、「学園祭（学生主導で展示や発表、模擬店の運営等を行う）」を挙げた回答者が多かった。「専門的な勉強ができる」というだけではなく、「[普通の]学校生活を送ることができる」ということも、高専の場合においては、中学生に知らせるべき、重要な情報になりうると考えられる。

6. まとめ

高専に進む理由が、必ずしもポジティブな「高専に行きたいと思う理由」とは限らず、ネガティブな「高専に行かざるを得ない理由」である場合もある、ということが示された。「卒業後の進学を目的としたA校への進学」は、多くの回答者が、「ある」もしくは「あると思う」と回答した。回答者に、卒業後の進学そのものを否定する教員はおらず、分野への興味や関心があることを前提に、むしろ「大学に行ってほしい」という回答もみられた。

なお、今回の調査と同じ時期に、A校を志望する中学生40名に対してもインタビュー調査（1人あたり5～10分程度、高専の志望理由及び進路意識をたずねることをメインとした構造化インタビュー）を行っている。自由回答で「(A校に限定せず)工業高専に進みたいと思う理由」についてたずねたところ、多かった回答は「専門分野への興味や関心」、「早く専門的な勉強が始められる」というものであった。「A校に進みたいと思う理由」についても、「自宅等から近い」や「学生や授業のレベルが高い」、「他の高専にはない学科や学びがある」という回答が大半であり、自分自身の卒業後の進学や、過去の進学実績に言及した回答者は3名にとどまった。一方で、高専本科卒業後の進路については、(40人から「未定」及び「回答拒否」を除いた)26名のうち、88.5%にあたる23名が進学を希望しており、強い進学志向がうかがえた。

中学生への調査は、自由回答式のインタビュー調査であったため、彼らが語る「志望理由」は、回答者本人にとって、真っ先に思いつく、特に主要なものに絞られると考えられる。教員の語りから示されたように、卒業後の進学がA校を志望する動機の一つになっている可能性は非常に高い。ただし、「卒業後に大学に進むために、中学生がA校に進んでいる」と解釈しても良いかどうかについては、疑問が残る。教員、中学生双方のインタビュー結果を踏まえて、おもな志望動機は「専門分野への興味や関心」、「早く専門的な勉強ができる」等であるものの、「卒業後の進学」も、高専の志望動機になっていると解釈するのが妥当であろう。

現在の中学生にとっての、国立工業高専に対するイメージは、次のようなものであると考えられる。多くの回答者（教員）が、卒業後の進学を目的としたA校への入学者の存在を認めていたことから、今の中学生が高専（A校）を卒業後の大学進学（進路達成）の手段としてとらえていると考えられる。ただし、同時期に同校で行った中学生への調査結果もふまえて、中学生が高専（A校）を志望する理由として先行するのは、あくまでも「専門分野への興味や関心」、「早く専門的な勉強ができる」等で

あり、「卒業後の進学」は、これらに比べると比較的弱い理由である可能性が高い。なお、高専（A校）が、高い学力がありながら、様々な事情で公立高校に進みづらい中学生の受け皿になっているという面から、このような中学生にとって高専（A校）が、大学進学のための手段になっているとみることができる。彼らの場合、（彼らが進学可能であると思われる）公立高校よりも高専（A校）に進む方が、レベルの高い教育を受けられる可能性が高く、それだけ卒業後に大学に進むことができる可能性も高くなるものと考えられるためである。

今回調査を行ったのは、全国の国立工業高専47校⁽¹⁰⁾の中の1校のみであり、得られた調査結果を、A校に限定しない国立工業高専全体の現状として一般化できるかどうかについては、十分に検討する必要がある。A校と同様に進学率が高い他の高専はどのような状況であるのか、あるいは他の特色を持つ高専ではどのような状況であるのか、引き続き調査を続けるべきであろう。また、これまでに調査を行った対象（高専志望者、高専生、高専教職員、高専卒業生）だけではなく、中学校の進路指導担当教員や高専卒業生を受け入れている大学の教員等、現在の高専を取り巻く様々な対象に対して調査を行う必要があると考える。現在の日本においては、企業の研究開発者や理工系の大学教員といった、理工系の研究職に就くためには、「高校→理工系大学→理工系大学院」というルートを経ることが半ば当然視されていると考えられるが、近年の高専（本科）卒業者の高学歴化によって、彼らが研究職に就くことも今後は珍しくなくなっていくと考えられる。そのような中で、「第2のルート」ともいえる、現在の高専が有する社会的価値とは何か。この問いに対して、高専志望者や高専入学者の進路意識という視点から迫っていきたい。

注(1) 回答者の特定を避けるために、5年刻みで表記している。なお、ここに示したのはA校での勤務年数であり、他の高専等での勤務年数は含めていない。

- (2) 1学年200名程度（5学科制）の国立工業高専が多い。
- (3) A校の推薦選抜において、グループワークの配点はそれほど高くない。グループワークの結果だけを理由に志願者を不合格にすることは、ほぼ不可能である。
- (4) 出願時の学科選択にあたり、「学科の人気の高低が学力レベルの上下に直結する」との考えから、「前年度の入試で倍率が高かった」等の理由で、本人の専門分野に対する興味や関心とは無関係に、出願学科を決める者がいるとのことである。
- (5) 一般科目の「数学」や「物理」をさしており、やや工学寄りのカリキュラム（高専用の教科書が使われる場合もある）ではあるが、普通科高校の「数学」や「物理」に比較的近い内容である。
- (6) 土木系学科に設置されている専門科目の例である。
- (7) ここでは、テレビゲームや、スマートフォンのゲームアプリのような、電子ゲームをさす。
- (8) 工業高専本科の専門教育（工学系の座学や実験、実習等）のカリキュラムが、授業時間数の面でも内容の面でも、一般的な大学工学部と同程度であるとされており、A校に限らず、多くの国立工業高専が、学校説明会等でこの表現を用いている。
- (9) ここでは、大学の理学部で学ぶような（理学系の）物理学や化学をさす。
- (10) 工業高専43校と、工業系のキャンパス（旧工業高専）を持つ新高専4校の合計である。

参考文献等一覧

（書籍，論文，文書等）

荒木光彦，2007，『技術者の姿—技術立国を支える高専卒業生たち』，世界思想社。

井上雅弘，2007，「高専教育に携わって思う我が国の技術者教育」『工学教育』第55巻3号，pp. 11-16.

小倉康，後藤顕一，猿田祐嗣，松原憲治，西村圭一，2012，「理系のキャリア意識と理系進路の意識形成過程」『日本科学教育学会年会論文集』Vol. 36，pp. 408-439.

小倉康，西村圭一，後藤顕一，松原憲治，猿田祐嗣，2013，「理系のキャリア意識と理系進路の意識形成過程（その2）」『日本科学教育学会年会論文集』Vol. 37，pp. 440-441.

阪本甚三郎，2013，「高専卒業生から見た高専教育の振り返りと今後の高専教育への期待」『工学教育』第61巻1号，pp. 224-227.

広田望，2018，「本当はすごい進学校「高専」」『日経ビジネスオンライン』2018年3月27日（最終更新：2018年3月28日）<https://business.nikkeibp.co.jp/atcl/report/16/031600212/032300011/>（2019年4月3日確認）。

福政修，2012，「高等専門学校における技術者教育の歩み」『電気設備学会誌』第32巻5号，pp. 328-332.

文部科学省，2017，「学校基本調査・平成29年度結果の概要（高等教育機関）」http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afiedfile/2017/12/22/1388639_3.pdf（2019年4月3日確認）。

文部科学省，2018，「国立高等専門学校の現状等について」（高等教育調査研究協力者会議「第4期中期目標期間における独立行政法人国立高等専門学校機構運営費交付金の在り方に関する検討会（第1回）」資料）http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/090/gjiroku/_icsFiles/afiedfile/2018/07/20/1407010_04_2.pdf（2019年4月3日確認）。

矢野真和，濱中義隆，浅野敬一編，2018，『高専教育の発見—学歴社会から学習歴社会へ』岩波書店。

矢野真和，濱中義隆，新谷康浩他，2015，「高専におけるエンジニア教育とキャリアの接続関係」『日本教育社会学会大会発表要旨収録』第76集，pp. 240-243.

（ホームページ等）

A校のホームページ（ホームページ上で公開されている入試要項及び学校案内を含む）

※ URL 省略